

水牛通信

人はたがやす

水牛はたがやす

稲は音もなく育つ

中国外券旅行 中井由紀子 2

特集・整理術

キーボードと日本語——室謙二さんに聞く 8

水牛通信の整理術 八巻美恵 11

料理がすべて 田川律 22

死体術 津野海太郎 12

キリコのコリクツ 玖保キリコ 19

この家の整理術 高橋悠治 14

「カフェ」ノート 高橋悠治 26

集めて整理せず 鎌田慧 16

僕はフリーのミュージシャン 坂本龍一 30

VOL.8 NO.7

毎月1回・10日発行

定価200円

中国外券旅行 中井由紀子

であり、同じ価値であるが、通用する場所が異なる。つまり、この国では外券しか使えない場所があって、たとえば、高級ホテル、レストラン、列車の一等、外国人相手の友誼商店等では、外券しか通用しない。日本でも有名なあの青島（チンタオ）ビールも外券でしか買うことができないのである。経済の理に従って、当然この国でもブラックマーケットがあり、外券は1:3ないし1:5のレートで人民元と交換されているという。ここまでだと、外国人にはまるで夢のような国になるのだが、当然そういふわけにはいかない。中国では、二重通貨制と同時に二重価格制がしかれていて、しっかり外人料金というものがまかり通っているのである。たとえば列車の値段、外国人が普通切符を買うのは、ホテルか旅行社で、ここでは、一等車の切符しか買えないが、これは中国人の一等車の料金

の倍である。また、非常に露骨なのは観光地の入場料で、北京の胡宮では、中国人5角に対して外人3元、実に6倍であった。ホテルに泊まるとしよう。外国人向けホテルの料金はほとんど日本と同じであって、およそ1万円、私たちが泊まった留学生向けの宿舎が、5元から15元、十倍以上である。現在中国では、外貨獲得のために、門戸を大きく開き、外国人を外賓として遇する方針をとっている。政府のこの政策と外券の威力だけが、個人でこの国を旅しようとする私たちにとっての武器なのだ。

それでは、真赤な表紙に菊の御紋章のバスポートにわが身を託して、中国の旅をはじめよう。

到着した日の予定は、午後10時20分発の夜行で天津に向かうこと、それまでの6時間余りを「今日だけはせいたくをさせてあげる」というおケイさん

のエスコートで高級ホテル・和平飯店に入り食事。4品と包子（パオズ）、チンタオビール6本で49元。チンタオビールは普通サイズの缶1本3元である。味は淡泊、上海料理は比較的薄味だそう。時間があつたので、ホテルのなかのカフェへ行く。ジャズの生演奏つき、お客は外人ばかりで、国籍不明の世界。水割りとカクテルで36元、高い！ この時から10元以上は高いという経済観念を私たちはすっかりとつようになつた。

さて天津までの夜行は、軟座つまり1等寝台車で4人用のコンパートメントである。相客は幹部とみられる男性（もっとも、おケイさんに言わせると1等に乗る客は全員幹部ということになるのであまりあてにはならないが）。車中1泊で翌日の午後8時に天津に着く予定。中国の列車には、硬座（2等車）と軟座、それぞれの寝台車があつ

4月26日午後3時45分、上海空港に到着。時差一時間、東京から三時間、ほんとに近いお隣の国である。

出迎えはおケイさん、彼女は天津の南開大学に学ぶ語学留学生。そして私の連れは彼女の夫であるO君。つまり留学中の妻に会いがてらゴールデンウィークを中国ですごそうというO君夫妻の計画におじゃま虫よろしく私が乗したという次第。無粋といわれようとも、旅は道連れ、でありましょう。

さて、おケイさんがお金を換えに行くとしよう。中国の通貨は、元。現在円が強、一元約60円。10万円で我々三人が二週間すごせる予定である。ところでこの通貨、現在中国では二種類の元が通用している。一つは、外券といわれるもので、我々が空港や銀行で両替するとこの券をもらう。もう一つは中国国内で通常流通している人民元である。この外券と人民元は額面は同じ

て、各車両には絶対的な権限をもつ車掌がついている。コンピュータはもちろん電話も発達していないこの国では指定席の二重販売も珍しいことではないが、そういう場合でも車掌の決定がすべてに優先し、切符をもっているも涙をのんでひきさがりしかないのだ。そのかわりこの車掌さん、お茶をだすことから、トイレの掃除まですべてを切り回している。そのほとんどは女性である。

さて、中国の列車事情で忘れていけないのは、走行距離の長さであって、車中泊10日などというのはザラ、したがって、旅をする人はみんな大荷物をしょっている。駅前に座り込んで時間を待ち、改札があくと一斉に列車に向かって走り出す。この瞬間プラットフォームが地鳴りして揺れるほどの勢いである。布団をかつぎ、食器と食料、お土産をいっぱいかかえて、猛烈な勢いで

で列車に突進するのだ。というのは、長旅だから座っていききたいというのはもちろんあるが、なによりも荷物の場所を取らねばならないからだ。私たちはただただあっけにとられて見ていた。時間どおりに列車が動きだすとすぐに二十才くらいの女の車掌さんがポットにお湯をいれてもってきてくれる。サービスはお湯までで、お茶っ葉と湯のみは各自持参。たいていはふたつきの陶器の湯のみと小さな缶にはいったお茶っ葉をもっている。さすがにおケイさん。中国生活9カ月の経験を生かしてインスタントコーヒーにティーバック、食パンにチーズ、ハムの缶詰まで用意してあった。私たちは1等なので食事をどうするか車掌が聞きにくる。朝食と夕食をたのんだ。窓の外は真暗だ。列車はひた走りに北を目指す。夜が明けると、外は田園風景、ただただ広い。ぼちぼち農作業をする人々

の姿がみえる。何をしているのか、いずれにしろあまり勤勉にはみえない。午後になって黄河を渡った。このあたりになると土の色が黄色くなってくる。食堂車の夕飯、1汁6菜とビール、中国では全国銘柄はなく、各州それぞれつくっているので車中で飲んだビールもチンタオビールとはちがっている。それぞれにおいしい。

天津市、今夜の宿舎は、おケイさんの大学、南開大学の招待所(留學生の寮)。シャワーを使って彼女の部屋へ。8畳くらいの広さで2人部屋、ベッドと机、間に毛布を敷いてカーペットがわりに。ルームメイトは西ドイツの24才の看護婦さん、その他の留學生仲間には、ポーランド、アメリカ、華僑のオランダ人、日本人等。彼等の会話は、中国語か英語、日本人はかなりたくさんいてそこではもちろん日本語である。この国では、外貨獲得のための門戸

開放と同時に、もうひとつ重要な政策がある。それは精神汚染防止、そして汚染の源は外国人であるから、外国人をできるだけ隔離する方針でもあって、同じ大学でも留學生は宿舎も授業も中国人とは別になっている。

翌朝、子供の声で目がさめた。窓から下を見ると、招待所の前が保育所になっていてちょうど子供を預けに来る時間なのだ。中国は一人っ子政策をとっている。二人目からは児童手当がない、三人目は戸籍がない等、どこまで本当なのかはわからないが、かなり徹底しているらしく、ほとんどが一人っ子である。だから子供はとも大切ににされているし、甘やかされてもいる。晩婚のこの国では、死なせてしまうと子供をもつ可能性はほとんどないのだ。

大学の構内を散歩、久しぶりにアカデミックな雰囲気はひたった。綿毛が

舞っていた。バスで天津の繁華街にでる。「狗不理飽子」という有名な包子(パオズ)の店に行く。お前の作るものは狗も食べないと言われて発奮したコックが腕を磨いて有名にした店だそう、今では全国的に評判の味だそうである。ビールと3品で34元。おいしかった。このあと、日本のテレビでも紹介された南市食品街へ行く。有名なすべてのレストランが一堂に会しているという食堂街である。ととのいすぎたなんとなく入る気がしない。疲れたので、神戸餐厅という日本料理の店でコーヒーを飲んだ。冷房完備のきれいな店が18元。日本の商社マンが行くという。そういう値段の店だった。

一日中歩いてとても疲れた。暑さに負けて屋台のジュースを飲んだ。この時人民元がなくてやむなく外券で支払った。即座に人々が集まってきて珍しそうにお札を回覧する。おケイさんが

顔を赤くして「早く行こうよ」という。どうしてかというところ、外券を使う人はいないし、とても恥づかしいことなのだそう。

天津を歩いて、何故か人々に注目されるという体験をした。その注目の仕方が尋常ではない。頭のとっぺんから足のつま先までしっかり眺めるといってみると、この国では外人が珍しいのだそう。日本で見られるという晴れがましい経験のない私は、最初の内はなかなか気分よかったのであるが、2時間もすると、いいかげんにして、とやむを得ない気持ちになってしまった。それほど執着心があるのである。アジア人はまだいい方なのだそう。かわいそうなのは、紅毛碧眼つまり西歐人、彼らはたんなる注目にとどまらず指さして笑われ、年寄りにはこの世の名残とばかり胸ぐらをつかんで上から

下までなめるように見られるという悲劇だそうである。

閑話休題、中華思想というのがある。この国の一般の人々の外国人に対する態度を見てみると、ほんとに世界の中心は中国だという気持ちになる。ここではほとんど英語は通じない。したがってカタコトの中国語か手ねで話すことになるが、これに對してかえってくるのは、早口の中国語だけ、相手が中国語を理解できないということに、信じられないくらい無頓着である。外国人が外国語を話すということをやっとして知らないのではないかと思えるくらい、それは徹底している。政府にとつては外賓である外国人も一般の人々にとつては、珍しい動物のようなものなのだ。北京の天安門広場の隣に胡宮がある。ここは皇帝のすんでいたところで、この宮廷の真中に水晶の間というのがある、そこには宇宙の中

人ごみ、人々は明るく屈託がないように見える。バスを乗りついで觀光地、龍門石窟へ行った。夏のような陽ざしで、人があふれていた。この屋台で珍しいものを食べた。米の粉をとろてんのようにかためて、それをけずって辛いタレをかけたものと、それをブツ切りにしてやはり辛いタレでいためたもの。おいしかったが冷えたビールが飲みたくなってしまった。そう、この国では冷えたビールは普通では手にはいらないのだ。

帰りはバスが混んでとても乗れなかった。3台ほど見送ってどうしようかと思っていると、男の人が近づいてきてお케이さんに何やら耳打ち、彼女がうなずくと、三輪車がやってきた。原付の自転車に荷台をつけたもの、どうみても二人しか乗れないところに三人乗り込んで出発。バスで30分くらいのところを1時間以上かかったけれど、

心である水晶が置かれている。文革にも破壊されなかったこの水晶を見てみると、この国の人々にとつて中国は確かに世界のみならず宇宙の中心ではないだろうかという気分になってくる。皮肉ではなくてそれほどに、彼らの自

信に圧倒されてしまうのだ。圧倒されるといえば、彼らの食欲には、ほとほと感動してしまった。たとえば、北京には、都一処という有名なしゅうまい屋があって、客が列をつくっている。私たちもここでお昼を食べようと列に加わった。といってもここでは、客が勝手に終わりそうな客の後で椅子の背をつかんで待つのである。要領のいい人は早く席につけるが、我々のように慣れない客は、どんどん割り込まれて、30分もたつてようやく席につくことができた。ここで出てきたしゅうまい、日本の優に3倍の大きさのしゅうまいが一人前およそ30個。これにスープと

ほんとの農村の真ただ中をゆっくり走ってくれて最高に爽快だった。閑林の市場というのがすごかった。なにしろ歩くことができないくらいの人混みなのだ。ここではそれこそなんでも売っていた。生きたにわとりも犬もそして猫も。ペット用とは思えないが、あれで食用になるのかと思うほどちっちゃいのが売られていた。

翌日私たちは、夜行で武漢に向かう予定である。けれど、この列車の切符がとれなかったのだ。所要時間14時間。中国に個人旅行できた外人がまず最初に耳にする言葉は、「没有(メイヨ)」である。「ないよ」という意味であつて、この言葉を覚えると、これがこの国で一番羽振りを引きかせている言葉だということに気がつくことになる。駅で切符を買おうとすると「メイヨ」、ホテルで部屋をとろうとすると「メイヨ」、ひどい時には、郵便

2品くらいが彼らの通常の昼食なのだ。レストランに入って隣のテーブルをみると、食べ散らかした食事のあと。私はふと、歴代の中国の政府は、この膨大な人口の巨大な胃袋を満たそうとして、刀折れ矢尽きて倒れていったのではないかと考えてしまった。

話がそれってしまった。ついでに行程をはしょって、一気に洛陽までくだろう。洛陽はいうまでもなく中国の古都。ここで旅行中、最初で最後のホテルに泊まった。50元と80元の二部屋でお風呂付き、洗濯をして部屋中清鑑飾。夜テレビのニュースでソ連の原発事故を知った。翌日はメー・デー、この日から4日間お休みだそう、街中人で溢れている。朝、市場に行った。食べ物がおいしそう。はじめて汁そばをみた。それにチマキ、くだもの、ぎょうざ、包子、野菜に日用品、漢方薬、ほとんどなんでも売っている。それにすごい

局で切手を欲しいと言つても「メイヨ」である。ほんとに無い場合もあるが、全員が国家公務員のこの国では、頑張つて働くといい発想がないので、ただただ仕事をしたくなくて「メイヨ」と言う場合も多いのである。こんな時、お役にたつのがパスポートと外券なのだ。日本のある商社マンの話では、切符を買う時は、パスポートに外券をはさんで窓口に出すという。日本のパスポートはよその国に比べて大判でしかも真赤なので目立つのである。一見して外国人に見えない日本人が外国人の特権を利用するのに、この少々恥ずかしい大仰なパスポートがおおいに役立つという喜んでいいのか、悲しんでいいのかわからないような話があるという。

さて、切符を買えなかった私たちは列車に乗ってから車掌と交渉することに決めて駅に向かった。(つづく)

特集・整理術 キーボードと日本語 室謙二さんに聞く

ツノ「きみはわりと文章のスタイルについて意識的な人みたいだね」ムロ「そう思う。ぼくは文章語らしい文章語じゃない日本語を書きたいんだ。文章語は口語のリズムと勢いを取り入れなくてはダメだと思う」

「いつごろから、そんなふうに考えるようになったの?」

「二十歳を少しすぎたころ」

「そりゃ早熟だよ。おれなんか四十過ぎてからだもん」

「そのころ『思想の科学』で、カセットレコーダーを使って、インタビューをまとめる仕事をやらされたのね、鶴見俊輔さんに。あれがきっかけだった。耳で聞いた話を文章に起こすと、かならずつまらなくなっちゃうよね。なんとかあの時間、勢い、リズムを再現できないものかと考えながら、テープを起こしてたから」

「テレコを使った文体変革だな。そのあと、ひらがなタイプを使い始めたんじゃないか?」

「うん、あれは梅棹忠夫の『知的生産の技術』を読んで、おもしろいと思ったから。しばらくのあいだ、テープ起こしだけじゃなく、資料整理のためのカードとか原稿の下書きに使ってた。だけど、ただかぶれて買ったんで、すぐに挫折したけどね」

「そうとばかりもいえないんじゃないの。いちど『思想の科学』の編集会議

に呼ばれたことがあったけど、あのとき、きみがタイプをポンポン打ちながら会議をすすめるのを見て、びっくりしたことがあるよ」

「それは数年後に、はじめてアメリカに行ったあとのことだと思う。アメリカに行くと、どんな書齋や事務所にもかならずタイプライターがあって、文章とか文書をつくるということが、日本とアメリカとではちがう意味をもっているということに気づいたんだ。それともう一つ——その旅行中に、IBMの電動タイプライターに二千語だったかの記憶装置がはいっているのを見て、いつかキーボード入力のコムピュータ日本語タイプライターができるかと直感した。それで日本に帰ってきてすぐに、新しいひらがなタイプを特注したわけ」

「なるほど。そこではじめて動機がはっきりしたわけか」

「そのあと十年間は、ひらがなタイプで仕事をした。あのころ書いた原稿はぜんぶそれで下書きをしてるよ。できるだけ日本的日本語から離れたかったからさ。日本的日本語というのは、ちょっと意味不明かもしれないけど」

「わかんないでもないよ」

「そんなわけで、ぼくのキーボード日本語についての考えは、最近ワープロで文章を書きはじめた人たちより、ちょっと年期がはいってるんだ」

「なんだ、おれに対する皮肉か?」

「いやいや」

「しようがないか。そのワープロにしろたって、おれはきみに刺激されてはじめてんだから」

「それにコムピュータのことも勉強したから、コムピュータと日本語についても考えざるをえなかったしね。コムピュータで日本語を書くことの問題点はたくさんあると思う。もっと議論さ

れてしかるべきなのに、日本の日本語の保守派でさえワープロを歓迎しているんだもん」

「山崎正和なんて人は典型的にそうみたいだな。でも、いまの学校教育では不可能になった旧仮名・旧漢字を、コムピュータによって可能にするという考え方もあるんだからな。もしかしたらワープロは日本語保守派にとつて、文字どおりの機械じかけの神さまなのかもしれない」

「わけもわからず批判するよりも、いまはコムピュータと日本語について、もっと知ることのほうが大切なんだらうとは思うけどね」

「きみのいうキーボード日本語というのは、どういうものなの?」

「手で文章を書くときは、日本語には漢字があるから、どうしてもスピードがおそくなるよね。原稿用紙の升目のなかで右から左に、左から右に、いろ

んな方向に指を動かして漢字を書きつつ、それで一定のスピードを維持しなければならぬから、とつても複雑な筋肉の制御が必要になる。

「ただキーボードの場合は、いちど覚えれば、あとは単純な動作の組合せと反復だからさ。それを十本の指に分担させる。指はほとんど無意識のうちに動く。頭の中に生まれたことばが、口語にちかいスピードと勢いで、指をとおしてコムピュータの中に定着される。つまりスポーツとしての作文といったものになるんじゃないの。」

「それからコムピュータ相手にキーボードで対話していくようなところがあるから、無意識のうちに対話的文体が生まれてくることがある」

「無意識のうちにならざるかどうかわからないけど、そういう性質を意識的に利用して対話的文体をつくることは、たしかに可能だと思うね」

「ジャック・ケラワックの『地下街の住人』という小説があるでしょう」

「ビートニックのな。むかし読んだ」

「あれを書くとき、ケラワックはトイレット・ペーパーみたいな長い紙を使って、一日十インチとか二十インチとといった勢いで、バンバン書きとばしていったんだって。まえの日に書いたところなんか絶対に読みかえさない。それはジャズの方法のまねだったと思う。リズムとコード進行によって即興演奏する。それとおなじことを小説でやるうとしたんだらうと思う。プロットがコード進行で、リズムはタイプライターのリズム。」

あるギタリストが「ある音のつぎにどの音を出すかというのは、指が出すのであってアイディアが出すんじゃない」といってたけど、訓練によってつくられた肉体の習慣があって、それが即興演奏を可能にするらしい。

特集・整理術 水牛通信の整理術 八巻美恵

八年目ともなると、水牛通信の整理術などあってなきがごとしだ。ほとんどの情報はわたしの頭の中にゴタゴタと、それを整理といえは、整理されているにすぎない。

月刊になったときに事務をひきついでみたら、金銭の管理がずいぶん杜撰な感じがしたので、しばらく帳簿というものを、わりあいきっちりつけてみた。一年ぐらいたつと、一カ月の収入と支出がどのくらいか統計上と感覚上の両方でわかるようになった。これで帳簿をつけた甲斐があったと納得して、帳簿のたぐいは捨ててしまった。振替貯金の残高と水牛通信用のサイフに入ってる現金の合計がすべての財産

おなじように、キーボードに習熟すると、「でした」とか「です」とか打つことが指の癖になるよね。そうじゃなければ、スピードなんて上がるはずがない。その証拠に、「だじどだかじどだばどばずどば」なんていうムチャクチャな日本語はスムーズに打てなくなる。それはそういう指の癖がつくられていないからなんだね。だから作文もまた指の癖である、と。どういふふうに分指の癖をつくるか、その癖をどう反省するか……」

「それはたしかにそうだな。おれは楽器はまったくだめだけど、楽器とワープロには似たところがあるのかもしれない」

「キーボードを日本語でいえば鍵盤でしよう。もともと楽器のことばなんだよね。オルガンやハーブシコードからピアノ、シンセサイザーにいたるまで、指によって音を能率的に制御するため

に生まれた道具がキーボードなんだからさ。そのために効果的に音をだして音楽をつくるための指の訓練体系がつけられた。

こうした鍵盤の考え方や仕組みを、文字を打ちだすために利用して、十九世紀のアメリカでつくられたのがタイプライターで、そのつづきにワープロがある。だけど日本ではキーボードで文字を打ちだす習慣がなかった」

「土台となるキーボード文化がないところに、突如、ワープロが出現したから、賛成派も反対派も過剰反応をしめさざるをえなかったということか」

「そう。ぼくのことばでいえば「日本語の工業化」という観点だけが走ってる。日本語という文化を、工業が効率とお金儲けの基準によって再編成しようとしている。ぼくはワープロ反対派じゃないけど、これに対しては当然の反論があっというと思うな」

で、その金額をみれば、あと何カ月黒字のままやってゆけるか、わかる。

通信のための道具は、まずワープロ。これは整理するもしないもない。かつては食卓であった机の約半分を占領して、ある、というだけ。そのかわり、原稿用紙の料は減った。たとえば津野海太郎の原稿はフロッピー・ディスクでもらって、ここで印刷する。たとえばデイヴィッド・グッドマンの原稿はすでに版下となつてとどく。あの家のワープロとこことは同じ機種だから（むこうの方がちょっと上等だけど）こういうことも可能なさ。手書きの原稿ももちろんあるけれど、それらの玉稿は次の号ができたところで無断で処分させていたたく。

読者の整理というのは、ひとつだけある。購読料が切れて次の購読料を払い忘れると、きっぱりと次の号は送ることをしない。これは水牛通信の原則

といえるただひとつのことかもしれない。でも、最近読者の名前もほとんど覚えてしまって、ながく購読している人だと特に、購読料を払い忘れているんじゃないかな、と思ったりして、次の号だけは送ってみたりしている。

バックナンバーで、意識的に保存しているのは、各一部ずつだけ。あとは残部があるものもないのもまちまちだ。たくさん売れ残るのは気分が悪いからなるべく残らないような部数を印刷する。できあがると、編集委員のメンバーには、頼まれなくても、何部かを送りつけておく。そうすると、編集委員会にバックナンバーがなくなっても、津野海太郎の部屋や、鎌田慧の仕事部屋などに、おのずから保存されることになるし、送ったあと、ほとんど残部がなくなつて、すがすがしい気持ちで次の号のことをかんがえはじめることができるという仕組みになっている。

特集・整理術 死体術 津野海太郎

学校をでてしばらくは六畳の下宿に住んでいた。その部屋がすこしずつ広くなり、部屋の数もふえていって四十年代にはいった。そのあと、こんどはだんだん部屋数がへり、いまは荻窪に十五畳ほどの部屋を一つだけ借りて暮らしている。

はじめ膨脹し、のちに縮小した。膨脹の理由は収入がふえたからだだが、縮小は金のせいではない。一人でいくつもの部屋を管理するのが面倒になった

い心境だろうと思う。

だが、気持よく死体になりきろうとしても、なかなかそうはさせてもらえない。まず電話のベルが鳴る。知人から手紙がとどく。

手紙は何日も開封しないまま、とうとう読まないで終わってしまうことがある。いやな気分になる。むかし島村抱月という人が「デカダンスとはなにか？」ときかれて、「返事をださないままの手紙がたまっていく状態のことです」とこたえたそう。デカダンスのはては死体である。でも、こういう死体術はいやだ。

電話にでないでいることは、もっと苦しい。そこで、よっぽどのがないかぎり、ベルが鳴れば受話器をとることにしている。

電話では、できるだけ明るい声で話す職業的習性がついている。だから明

からだ。

この部屋に越してくるとき、たくさんの家具や本や衣類を人にひきとってもらい、のこったものは売ったり捨てたりした。いまは机が二つと本棚が四つ、粗末な木のベッドが一つあるだけである。その本棚も、もうすぐ二つになるだろう。鍋は中華鍋と土鍋の二つだけ。食器も二人分ずつしかない。

マヤコフスキーの「ロスタの窓」の複製が壁に貼ってある。あとはチェンマイのナイト・マーケットで買った金属の仮面が二枚。

テレビは壊れたまま、NHKと10チャンネルがはいらない。集金のおじさんにそういっても、なかなか信じてくれない。これも遠からず捨てることになる。そのとき私は新しいテレビを買うか？ たぶん買わないのではないだろうか。

職業がら、外にいと大勢の人たち

るい声で話す。たちまち死体の境涯からよみがえってしまふ。私を電話でつかまえることは、あまりやさしくない。それなのに、私が部屋にいる時間をねらって、じつに的確に電話してくる少数の人たちがいる。私の不幸である。いや、私の幸福である。

ものを捨てるために必要なものがある。屑入れとかビニール袋とかが、その代表だ。

ワープロもそう。原稿を書くたびに書きつぶしの原稿用紙がふえるのがいやで、ワープロを買った。でも、私の部屋にペーパーレス社会は実現しなかった。紙を捨てるための道具によって、かえって紙の使用量がふえ、ためし打ちした紙でいっぱい屑入れや、プリント原稿を保存しておくためのファイル・ブックなどが必要になった。

むかしデイヴィッド・グッドマンが、たくさんの資料を厚い二穴ファイルに

と元氣よく話さなくてはならない。

だから自分の部屋にいるときは徹底的に黙っていたい。人がたずねてくることを積極的には好まない。人の声だけではなく、そうじて音というものが聞きたくない。痛風るとき買ったウォークマンをのぞけば、オーディオ装置も壊れたまま、当分、買いかえる予定はない。

なにもない部屋のなかで、黙って坐ったり寝たりしている。まるで棺桶のなかの死体だ。

したがって、いまの私に整理術というものがあるとすれば、それは不必要なものではなく、必要なものまでもほとんど捨ててしまつて、ガラんとした部屋のなかで死んだふりをする技術ということになる。死体でいることは、とくに幸福ではない。かといって不幸でもない。これは死体になったことのない人には、ちょっとわかりにく

きちんと綴じこんでいるのを見て、びっくりしたことがある。私にはそんな習慣がまったくなかったからだ。

なのに、それとおなじ二穴ファイルを、きのう私は文房具屋で五冊も買った。おそろしい。そのうち、大きなスチール製のファイル・ボックスまで買うことになるのではないだろうか。ものも人も捨てようとするば増える。整理が反整理を呼びよせ、棺桶の秩序が乱される。

捨てても捨てても増える人たちがいてくれるのはうれしい。死体も人間だから、そのことは否定できない。しかし、ものの増加はちがう。空間の増加もおなじ。けっしてうれしくない。にもかかわらず、それは増える。ゆっくりと、あるいは急激に。すでに私は足もとをすくわれかけている。私の死体術に、どこかまがったところがあったのだろうか。

特集・整理術 この家の整理術 高橋悠治

二階家の一部、二部屋プラス玄関と廊下に、二人のもちものをどう配置するか、という問題。この二部屋はこの数年間、生活と仕事のための空間すべてだった。食卓がわりの電気こたつの上の紙をひろげたり、かたづけたりをやっていたが、シンセサイザーで仕事をするように、ついに破綻した。食事だからといって、電源をぬいたり、ふとんをしくからといって、楽器のセッティングを解体していたのでは何もできない。最近、近所に一部屋借りて楽器類はそこにうつしたが、ものがへったようには見えない。

整理は理想だ。そこにいたる最短距離は、ひっこすこと、住みつかないことだが、それにはおかねがいる。家族になると、共同のもちものができるのもしかたがない。できる範囲で、家族でないふりをして、かぎられた空間のなかでものを移動させつづけるのが、せいぜいだ。

家が必要なのは、ものを置いておくためだろうか。食べたり、寝たり、仕事をするためだけなら、空間を所有していなくてもいい。家族が必要なのは、置いたものを世話するためだろうか。話をしたり、いっしょに何かするだけなら、どこへいってもいいはずだ。とまで思ってしまうが、わざわざそうする気にもなれないのは、ほかに理由もあるのだから。

この家では、しまいこむスペースがかぎられているのに、絶えずものを出し入れしている。主婦雑誌が特集しているような収納法でむだなくつめこん

だら、さがしだしてとりだすたびに、たいへんな手間になるだろう。区切られたスペースに分類した箱を隙間なくならべるのはかっこいいと思って、やりかけたこともあったが、一番奥の箱に入っているかもしれない小道具をとりだすのに、手前の箱を全部とりだしてつみかさね、さて目的のものはその箱にはなかった、というようなことをくりかえしたあげくに、これはだめだと決め、といっても、整理をやりなおすのも倍以上の手間なのでそのままにしておく。ドイツ語を高校で習った時はじめの方にあっただことわざ「目からはなれたもの、心からはなれる」は、この場合まったく正しかった。

押し入れや戸棚のなかですべてプラスチックの箱で分類されている家もあるらしいが、あれでは火事になったら有毒ガスで死んでしまう、というようなことは、主婦は考えないのだろうか。

この家で一番こまるのが本。教えたがり、本を書くたぐいの、参考書が必要とする仕事はしないようにしているが、それでも月収の1割以上は本を買っている。本箱三つを二人でわけて、それ以上の本は古本屋にもっていくのが追いつかなくなりそう。買った本でも3ページしか読まないものもある。むだなことと長年やんだが、3ページだけ読みたい本もあっていい、と思うようになった。そのために買うことはない、といわれても、それではおかねは何につかえたいのだろう。

職業がら、楽譜とレコード、テープのたぐい。これも決めた棚に入るだけしか置けないが、毎月増えつづけ、しかもそのほとんどは二度と使うことがない。こういうものは牛乳のように、有効な日付を期限を買った時に決めるという、と思っただけで実行はしていない。

この家に置き場所のないもの、自分の作品や記録のファイル。過去にたよらないですむ仕事のしかたをもとめているうちに、こうなった。そうなることを将来もあてにできない。有効期限をこえて存在する前に処分するのは、制作者の責任だ、と思いつつ、しかし、これも徹底できないなあ。したがって、置き場所もないのに、処分しそこなっただむかしの作品やレコードがいくらかのこっている。

一方、売った本を買いなおしたり、自分のレコードを借りたりすることも絶えない。そうすると、処分した時の決断そのものも迷いにすぎなかったのか。自分も裏切りつづけないと、生きていけないのか。ある程度のむだをのこしておくことが必要だ、と最近やっ

とわかった。二部屋しかないのに、いつもものをさがしている。一分前にもついていたえ

んびつも、手からはなれると、たちまち消えてしまう。斜め上を見つめてあらぬことに気をとられているせいらしいが、これがなおらない。だから、この家にあるものは、しまわないで、見えるところに出しておくのが、八巻美恵の整理術だそう。そうしないと、あれどこやった、と疑いの目をもらった質問になやまされる、というが、そうしてもなやまされているのが現実なので、結果として、この家の机の上、椅子の上、戸棚の上は、本とペンと衣類と皿とカバンの山であり、床の上にも本とグラスが散乱している。だが、それほどきたなくない、と感じている一方、二人ともきれいな好きを自認し、しかもそうじはきれい。だから、この家は「わが家」と思えない、というのが統一見解です。

特集・整理術 集めて整理せず 鎌田慧

土本さんは新聞のスクラップをいつも鞆に入れて歩いてるわ。好きなんだね。おれだって一か月ぐらい新聞をまとめて、切り抜くことがあるんだよねでも、ちゃんと貼らないから、切ったままで溜っちゃうのね。内容もおぼえてないし、結局、使えないんだ。カメラマンの三留も、よくやってるらしいよ、新聞記事のスクラップ。女房にせんぶやらせてるんだって。でも、あれは必要なとき、新聞社の

資料室や国会図書館に行くとかすりゃいいんだ。それを自分でやるというのは、強迫感だよ、強迫感。おれはやらないよ。だいたい、おれは新聞記事で原稿を書くことがないもん。必要なものは現地に行って、その図書館やなんかでさがす。そっちのほうが主だね。

たとえば、こんど高知の足摺岬にカツオ漁の取材に行った。あそこは、むかし清松村清水だったんだけど、それが清水町になって、周辺と合併して清水市になったわけね。その市立図書館に行ったら、市史が上下巻であったから、まずそれを買うわけよ。だいたい四、五千円で買える。

それから、それに付随する資料をほとんど集めるわけよ。市役所に行って市勢要覧とか統計表とか、県庁では事業課とか助成課に行って、どんな資料があるかと担当者にきいて、カツオ関

係の統計表やパンフレットを見せてもらう。それからカツオの組合に行ったら、その年報とかをしらべる。モチはモチ屋で、モチ屋に行くとモチ関係の資料があるから、それをせんぶコピーして、宅急便で家に送るわけよ。

カツオのまえは北海道の別海町にパイロット・ファームの取材に行った。香川県より大きい村なだけで、ファーム何十年史とか部落ごとの歴史とか——結構、いろいろあるもんなんだよ。たとえば青森県の六カ所村だったり、開拓部落が開発でつぶれると、みんな記念誌をつくってる。歌志内市史を見ると、炭鉱の歴史がきちんと入ってるしね。いま地方史のない地方ってないんじゃないかな。どんなへんびなところに行っても村史がある。

ただ学者だったら、それを集めればいいんだけど、おれの場合、実際にはあまり使わない。あくまでもバック資

料で、中心は会った人の話だから。

ただ特殊な用語とかね——たとえばおじいさんの話のなかに分かんない言葉があったとするとしよう。古い資料を見ると、それがきちんと図解してあったりするんだよね。なまじっかな学者の文章よりも、そこで生きている人たちの作文なんかのほうがいい。こまかいところは、そういうたもので裏づけをとるわけ。

自分のこと考えても、資料を集めるということにはマニアチックな面があるよ。「なんだ、あれを使ってないのか」といわれちゃうとくやしからさ。だから現地でも、かならず古本屋をまわるし、ふだんから神田の古本屋をまわって必要な資料を集めておく。三菱重工業の社史とかさ、尼崎造船所史とかさ、五十年史とか八十年史とかあるでしょう。社史とか市史とか町史とか村史とか部落史とか、そういうのはふ

だんから集めておくの。社史は、むかし三千円だったけど、いまは下手すると八千円ぐらいになっちゃう。社史と地方史は、すごく値段が上がってきてるんだよ。

たとえば「ガリバーの足跡」なんかだったら、釜石市に関係のある本はぜんぶ買う。それから製鉄関係の本とか製鉄経営者の本とか漁業とか鉱山の本とか……。『死に絶えた風景』だって、ずいぶん本を集めたんだよ。

ただ、集めた本が文章に直接でてるわけじゃないのね。資料を駆使して分析するとか、そんな肌合の人間じゃないからさ。本っていうのは、引用すると文章が変っちゃうんだよ。文献の貴重さにひきずられちゃったら、文章がつまなくなっちゃう。

現場では本は読まない。宅急便で送っちゃう。だって重いから持って歩けないじゃない。何回か行ったり来たり

しながら、ときどきパラパラとやっていると、だんだん資料が整理されてくるでしょう。本格的に読むのは原稿を書くとき。

そんなだから、いままで集めた資料はすごい量あるよ。仕事場は3K。そこに一杯になってる。

本はまだいいんだよ。背文字があるし、暇なとき棚の入れかえをしたりしてるから、だいたいの見当がつく。こまるのは資料のコピーね。ゴミみたいな紙屑。それはせんぶ項目別に袋に入れて、ダンボールにつめて押し入れに入れちゃう。ただダンボールの数が多くなると、索引がないから、もうさがしようがないんだよ。ファイル・ボックスをおくスペースはないし、だいいち、そんな整理能力はないから。いままで集めたもので捨てたものはないんじゃない。紙きれ一枚捨てたこと

ないもんね。だから労働運動史関係とか、闘争のピラとかパンフレットとかかなり貴重なものがあるんじゃないかな。でも保存はしても索引がないからさ、ひきだしようがない。整理する時間がないし、人をやとって整理してもらう金もない。

でもね、負け惜しみじゃなく、整理した材料を使って書くようじゃまずいと思うんだ、基本的に。取材して原稿を書くときに、いちど資料は使っちゃったんだから。いちど使った資料は、ものとしては残っているけど、文章を書いたときに必要な十行とか二十行とかを使って、あとは捨てちゃったんだから。それをもう一度ひっぱりだしてほこりを払って使うというのはスジがちがう。資料に依存してしまったら、それこそブッキッシュなものになっちゃう。だから自分の書いたものだけ整理しておけばいいわけよ。

だったら捨てちゃえばいいみたいなものなんだけど、やっぱりもったいないんだね。重い目をして、わざわざかついできたものを捨てられないという、さもしい根性だよ。

他の連中は、みんなどうしてるのかわあ。立花隆は別として、あとのルポライターは、そんなに資料は集めないんじゃないかな。他人のものを読むと、よく孫引きしてるやつがいるよ。おれの場合は、社史や市史もだけど、やっぱりその前の一次資料がほしいから、それをさがす。そうすると、結構おもしろいものがあるんだよ。

こんどのカツオの取材でも、カツオ協会が新聞記者に書かせた「黒潮を追って」というような本があるんだけど、そんなのはぜんぜんつまらない。そういうのじゃなくて、たとえばカツオ漁師からの聞き書きがあるんだね。昭和十二年だったかな、いまはつぶれてし

まった京都の出版社からでた本——それがすごくいい仕事なんだよね。おなじシリーズに宮本常一の初期の仕事とか、吉田三郎が書いた「男鹿半島寒風録」とかの貴重な本がはいってる。そのなかの一冊で、聞き書きだけじゃなく、漁具のスケッチとか、社会科学的な分析もちゃんとしてるんだ。

そういう本が町の図書館の倉庫かなんかで眠ってる。だからさ、まめに歩けば、そういう正史以外の埋もれている資料はいろいろあるんだよ。だけど、みんな歩かないからさ。

その点、おれは歩くのね。そうやって十年も二十年も、あっち行ったりこっち行ったりしてさ、そのたびに資料を集めては終わり、資料を集めては終わり、おなじことをくりかえしてるんだ。なんののかんのいっても、集めること自体が好きなんだろうな。ただし整理はだめ。まったくだめ。

キリコのコリクツ 玖保キリコ

幼い頃、「夜」はとても神秘的なものに思われた。

当時、私の両親は、しばしば子供を寝かしつけた後、近所の喫茶店にコーヒーを飲みに行っていたらしく、たまに、私が寝つかなくなったりすると、しようがなくて、私も連れていってくれたりした。

もちろん、2歳か3歳の私が、コーヒーを飲むはずもなく、テーブルの上にあるピーナッツの自動販売機に10円を入れさせてもらって、ポリポリとピー

ナッツを食べていた。

特にピーナッツが好きだったという記憶はないが、喫茶店以外でピーナッツの販売機を見かけることがなかったの、もの珍しかったのだと思う。

とにかく、本当ならとくに寝ている大人の時間に大人と大人の場所でごすとというのは、かなり新鮮なことであつた。

そして、それはそうしょっちゅうあることではなかったの、なおさらおもしろいことのように思われた。

昔、大みそかが大好きだったのは、それが夜明かしの許される唯一の日だったからだ。

小学生の頃は、9時には布団に入るのがキマリであつた。

特に寝の厳しい家庭、というわけではなかったが、とにかく9時になったら寝なければならなかった。

「火曜日の女」というのが見たくて

たまらなかつた私は、コタツで足を暖める、というのを口実に何とかしてTVのある部屋に居座ろうとしたが、30分が限度だった。

仕方がないので、布団に追い立てられて見ることでできない後半30分を、布団の中であれこれ想像し、翌週の前半30分を見て、自分が作った物語を調整していた。

私の母は、とにかく徹夜をしてはいけない、という主義だったらしく、大みそか以外の夜ふかしはもちろん、たとえ、それが学校の宿題のための夜ふかしでも許さなかつた。

勉強をしていて、ふと後ろを見ると、母親がじっとにらんで立っていたりするのだ。

夜中にすさまじい形相の母親が無言で背後に立つ、というのはかなりコワイものがある。

コワイので、その勉強が翌日提出しな

ければならない宿題でも途中でやめて
すぐさま寝た。

そうしなければ、彼女は何度でも夜中
私の後ろに立つのだ。

それでも徹夜をするようになったのは
高校に入ってからで、倫社のレポート
のための徹夜が生まれて初めての完
徹だった。

テストがなく、レポートの提出のみで
点数がつけられる倫社に対して、さす
がに母親が恐いから徹夜はできないと
も言っただけならず、夏休みの宿題を登
校日の前日にやるタイプの生徒であっ
た私は、当然徹夜をしなければならな
くなくなった。

子供の頃から引きずっていた神秘性
も、甘美なものもなく、私の徹夜初体
験は、頭痛と吐き気と共に終わった。

「眠ると夜は長いのに、起きてい
ると夜は短い」というのがその感想で、
区切りのつかない前日からの延長は、

に必要であった。

この「睡眠黄金期」は私がOLをやめ
る時まで続いた。

OLをやめて3ヶ月くらいは、がつ
がつと睡眠を貪っていた。

本当に食べたりないいいじきたない子供
のように、起きて食っては寝、また起
きては寝というように、寝たきりの日
々が続き、夜が夜の機能を、昼が昼の
機能を果たさなくなってしまった。

生活がそういう風になっちゃくちやにな
ると、いくら時間的にはたくさん寝て
いても、どうも疲れが体に残るとい
う症状が起きてきた。

運動不足だ。

そこで、生活に区切りをつけるため
にも、健康のためにも、スイミングス
クールに通うことにした。

汗をかいても気にならないし、そんな
に運動するつもりはなくても水中だと
運動量は多くなるというのが、ものぐ

とてもきつかった。

大学に入るようになると、徹夜の量
がぐんと多くなった。

眠っているのがもったいないと思っ
ていた時だ。

眠るよりは起きて何かをしていたかっ
た。

眠ることがとても無駄なことのよう
に思えた。

そして、自分の若さを過信していたの
で、体力にまかせて、何日も寝ない日
が続いた。

かなり、徹夜のし方は上手くなり、自
分をコントロールできるようにはなっ
た。

で、何をやっているかと言うと、割と
ぼーっとしていたりすることが多く、
決して、その時間を有効に使っている
わけではなかった。

もちろん、本を読んだり、マンガを描
いたりもしていたが（この場合、マン

さな私の理由である。

水泳はかなり気持ちのいい運動だっ
た。泳いだ後の心地よい疲労感は何と
も言えない。

ただし、正常な生活をしていれば、
だ。

朝8時半にスイミングスクールに出
かけて行くというのは、私の生活時間
帯からすればとてもつらい。

「早起きをしなければ」というプレッ
シャーも加わって、ヘタをすると前夜
眠れなくなる。

必然的に徹夜明けの状態で泳ぐこと
になる。

泳いだ後は、非常に疲れるのだが、疲
れ過ぎて眠気がとんでしまう。

その日の夜も眠れなくなり、次の日の
夜、狂ったように、2日分の失われた
眠りを取り戻そうとするかのように眠
るのだ。

半日以上も眠る日が2日は続き、やっ

ガというのは玖保にとって有効なこと
とみなします。大半は、説明するの
も難しい、ぼわーっとした雑事で、あ
とから考えると、非常に混沌とした中
で時間を費していた。

そしてそのカオスは私にとって心地よ
いものであった。

大学を卒業して社会人となった私に
とって、「眠り」の位置は大逆転し、
オンスで売り買いしてもおかしくない
ほど貴重なものになった。

OLになるとほぼ同時に、漫画の連載
も始まってしまったからだ。

最初はすることなすことすべて物珍し
くて「ルンルンOL」していたが、さ
すがに二重生活が続くと、疲れもたま
り、「お疲れOL」とまで言われるよ
うになってしまった。

だからこの時期、私にとって一番大切
なものは「睡眠」であり、お昼休みの
食事よりはお昼休みの屋敷が体力維持

と体が元通りになりかけた頃、再び、
スイミングスクールへ行く日の前夜が
やってくるのだ。
そして「早起き」に興奮して眠れなく
なる……。

ドグラマグラのようだ。

この恐ろしい悪循環。

水泳はとても健康的だと思っただけ
れど、私の場合はそうではないらしい。
それに徹夜明けの水泳は危険だ。「足
がついたら死んじゃった」なんてこと
になりかねないのでやめた。

今現在、私は「睡眠黄金期第二期」
に入っている。

夜の眠りはとても貴重だ。

神祕のベールがはがされて、夜は私に
は現実のものとなっている。

それでも、夜は、隠しておいた秘密が
まだ残っているかのように、私を誘う
のだ。

私は夜ふかしが大好きだ。

料理がすべて 田川律

（ピッカピカの台所）もちろん、わが家のことではない。川崎の生活クラブ生協で雑談をしている時のこと。最近高島平団地で調査したところ、家の中にほうちょうとまないた、がないうちがずい分あるという!! ハサミだけあれば充分だそうだ。そう、なんでもプラスチックに包まれていて、それを温ためさえすればいいのだ。そのプラスチックを切るためのハサミだけあればいい。台所はいつもピッカピカ、というわけだ。

この話は、棒卵の話聞いた時より

それぞれの行程のモモ肉の行方だ。係の人の話では、これだけ準備して、本番ではほんの真似事しかしないのに、それでもそこで失敗が出た時のために、もうひと組モモ肉が用意されてるとのことだ。つまり、四人前のトリ料理に二十人前のトリが用意され、オソラクハそれは全部ゴミ箱へ行くのではないか。その場には常時十人ぐらいの人が、こうした下準備のために働いているように、誰もがぼくの料理——正確にはぼくがするはずで、献立だけした料理なのだ——を「オイシイ」とは言ってくれたものの、それをもう一度作って食べるとは思えなかったもの。

その日は、ぼくも含めて五人の料理が予定されていたようだ。戸棚の扉の板にスケジュールが貼られていたからそう思うし、準備用の長いテーブルには、大きな銀の皿に魚が丸ごと一匹、石膏のギブスでもはめているように、

ぼくにとってはショックだった。なるほど、ハナビシ・アチャコがカロリー・メイトをかじりながら、車を転がしているワケだ。

料理なんて、今に「遺跡」になってしまふのか。

（五倍の材料）その「遺跡」になりそうな料理の番組の収録に出かけた。場所はテレビ局でなく、な、なんと、新宿副都心のホテル・ハイアットとつながっている褐色砂岩もどきのビル10階。かねてより、ちらちらと時折り見るテレビの料理番組の「やらせ」とでもいふべき手順のよさには驚いていたが、いざ現場に入ってみると、驚きを通り越して呆れるほどだ。ぼくは先月この欄に書いたように、トリのレモン煮をやることにしたが、それが各行程毎に用意されている。つまり、まず何の手も加えてないトリのモモ肉。次にほかのヤサイとワインにつけ込まれた

トリのモモ肉。次に皮だけキツネ色に焼かれたトリのモモ肉。最後に出来上がったトリのモモ肉。そうなのだ。ぼくがいった時には、ぼくがするはずの料理はもう誰かの手で作られている。それでもリハーサルというのがあって、本番がある。ぼくがしたのは、何も手を加えてないモモ肉に、すでにオロさされているニンニクとショウガをこすりつけて、ワインを注いだのと——塩、コショウは司会の庄野真代さんがふってくれた——フライパンにバターを溶かして、つけ込まれたモモ肉をそこへ並べただけ!!

これでは、いつもこの季節になるとバカにする濠の向う、二重橋のあちらで、長靴はいて田植えの真似事をするジイさんとおんなじではないか。もうこれからは、あのジイさんのことを笑えないではないか。

なによりも、気になったのは、それ

身体中をメリケン粉を練ったものらしきものに包まれて横たわっていた。ああこの魚も五匹いるのか! と思うと撫然となった。

同じテーブルの別の端には、透明なプラスチック容器の中に、オニギリが二つばかり、それも色が着いていたから、山菜オニギリでもあったのかもしれない。これはここで働いている人の屋食の残りに違いない。このアンバランス。

しかし、この番組はこれまででもずっとあったろうし、これからもずっとあるだろう。そのたびに、毎回二十人前があたり食べられない料理、となつてゴミ箱へ消えていくのだ。

いや、でもひょっとすると、これらを専門に下取りしている業者がいるかもしれない。それが、どこか、副都心から離れたところに、レストランを経営していて、さりげなく、この材料を

使って、お客さんに出すものを作っているのではないか。

それでも、その方がゴミ箱に直行するよりずっと有益ではないか。もしまだ誰もいないなら、ぼくが申し出てみるか。毎回百人前の材料があるのだ。週に二日とか、を収録にあてるといふから週に二百人前か。

黒テントの諸君! ホテル・ハイアットの隣のビルのゴミ箱を狙え。きみたちの辛い旅公演の食料はもう何の心配もいらぬぞ。なにしろ、数年前、この旅公演の座付料理人をした時に、ぼくに与えられた予算は三十人前一日二食で主食の米やパンの購入費も入れて、たったの一万五千元（ひとりあたりではない、全体で）だった。京都では、一度入ったCOPPのスーパーが高かったので、途中までカゴに入れて運んでいた人参や大根をまた元に戻して手ぶらで出て来て、出町柳の八百屋

へ行ったぐらいなのだ。

〔時知らずと魚市場跡公演〕梅雨に入る前に、梅雨を逃れると称して北海道へ行った。釧路では、「野の音コンサート」をやった公会堂から下ってきた所にかかる弊舞橋のもとにある今は使われていない魚市場の建物の中で、大塚まさじがうたった。あちこちに鋼鉄の重い扉がついているカマボコ形の建物の中は、埃っぽかったが、ほとんど魚の匂いはなかった。去年はそこで「千人バーベキュー・パーティー」を開いたというが、今回はささやかに、その一部を使って、四十人ほどの人を集めてコンサートをした。広い市場の中はガランとしている。ここでやろうとした場所の上の方に、細長い板が一枚取り外すのを忘れられていて、そこにはマジック・インキらしきもので「タラコ、イクラ、トビツ子、スジコ売場」と書かれていた。

くれたので、ヤエルちゃんとカイくんが先客のおばさんと遊んでいるスキにこそこそと食べた。「まるで追われている身みたい」といったら、和子さんは「わたし、そういう家になりたいの」とケロリとしていった。

その次の日は、ヨーガ教室の夏休み前最後の日だったが、仕事が遅れていたのので、サボってご飯だけ食べに行った。いつものように、ヨーガ参加者が、それぞれいろんなものを持ち寄ってオカズができる。ぼくはままかりの余りを持って行って、事実上のままかりをした。この日は美恵さんが前日作ったココナツ・ミルクを使ったカレー。森のぞみさんはトリの身をほぐしたものにキュウリなどの細切りを加え甘酢味にしたものを大葉でくるんで食べるもの。「先生」の平田繁子さんはスティーム・ポークと、カイワレとゆでたまやしを、たれをつけて食べるも

次の日、カキの町厚岸で「生活改善

センター」の教室でコンサート。つい「生活保護センター」といいたくなかったのは、こっちの年齢のせいかな。主催者は漁師。それも魚をとらないで、カキと浅利とコンブとノリをとる漁師。中島均ちゃんといひ二十八歳。コンブ漁の最中で大変だったみたいだが、四十人も集めた。打ち上げは厚岸湖のそばにある均ちゃんのうち。友だちに貰ったという「時しらず」——季節はずれの鮭——を、ぼくがおろして、バター焼きにした。ほかに、カキを、生で食べ、焼いて食べ、蒸して食べた。次の朝、五時に起こされたら、均ちゃんはもうコンブ漁に出ていってしまった。〔ままかりとちくわと郵便配達〕出身大学が大阪なので、関東に住んでいる級友は少いが、そのうちのひとり、友人の親戚から、岡山地方のままかりとちくわと海老のこうじ漬を宅急便で

の。みんなおもしろかった。雷雨が来る前にそそくさと逃げた。

〔アービーズとうな鉄〕食い逃げなんかしたせいで、散財のうき目があった。いや、ホントは順序は逆で、散財のうき目があったので食費を節約するため

に食い逃げをしたのかなあ。ことのおこりは、渋谷の商店街のド真中で、いつもお世話になっている旅行代理店の友だちに会ったことだ。

「やあやあ」といい、お茶でも、ともっとも安い店のひとつ「アービーズ」へ入って、かれとその連れはアイス・コーヒーとジュース、ぼくはビーフ・バーガーを買い計五百円を払った。さて食べようと窓辺に立ったとたん「ジャンジャン」の若者たち三人がやってきた。その前に「ジャンジャン」で電話を借りたりしてたので、つい「飲みに行か」となって、今度は四人連れで井の頭線のガード下の「うな鉄」へ

送ってくれた。いっぱいあったので、あちこちにお裾分けをした。海老のこうじ漬は、国民健康保険料の集金のおじさんにあげた。ちくわは、三日に一回ぐらゐ主にレコードを配達してくれる郵便局のおじさんにあげた。このおじさんは小柄でイキのいいおじさんで「ありがとうございます。車の中でいただきます！」と帰っていった。言葉数の多い新居さん、とても年輪はお困気のおじさんだ。もっとも年輪はおじさんの方がだいぶ上だ。

〔食い逃げ〕今月は二度も食い逃げをした。といっても有料のレストランでなく友だちの家だから「お縄」にはならなかったが。一度目は、グッドマン一家が間もなく離日する、というので、和子さんにおせん別代りに本を届けに行った時のこと。夕方で、先客もあり、忙しそうだったが、和子さんが「鮭めしでも食べて行く？」といって

行った。串焼のたぐいは一本三百円ぐらいなので、ついつい油断して次々にたのんで、ビールを四人で三本ぐらい飲んで、つい「ええわ、おごったるわ」といってしまった。おあいそしてもらたら、一万円に近かった。「しもたなあ」と思ったが、あとの祭り。しかしこうして、ぼくの帳尻というのは合っているのかもしれない。

ハンバーガーはどうしたのだろう、と心配する向きもあるだろう。これはくだんのふたりにあげてきた。翌日の旅行社に電話して、タイ行きの切符の値段を聞いたら、八月十六日からは安くなるというので、頼んでしまった。こんなにも外で食べてるようでも、ひと頃にくらべると、家にいることが多いので、米がすっかり減っていく。「座して食らえば泰山も空し」とはまことによくいったもの。そういえば先月の「魚頭鶏」は「魚身鶏」だ。

「カフカ」ノート 高橋悠治

ペンヤミンがどこかで引用している。じゅうたんのようはどこかでゆがむ。そこで認識は跳躍できる。

どこかでよんだ。インディアンのかごはあみあげてしまわない。どこかをのこして魂の出口にする。

ワヤンの物語はおわらない。最後のたたかいのなかでしばいはおわる。

不完全が魂の行き来を自由にしてくれる。

それにくらべて「独裁者オイディプス」。悲劇をはじめるのは人間の思いあがり。悲劇をおわらせるのは機械じかけの神々。この時も、機械は神々におなじ、機械になりたい人間は身の

ほど知らずの罰をうけた。

デジタル・シンセサイザーの安定した回路で不安定な音をつくると、それはおどろくほどたくさん情報の消費する。耳には連続変化ときこえるものも、こまかい段階変化のつみかさねでできている。それは記録して固定するには不利で無意味だが、即興には向いている。

シンセサイザーのオーケストラ的あつかい、なめらかな音、背景音、正確なビートではなく、ソロ楽器としてのシンセサイザー、コントロールをこえて変化するノイズ、背景をはぎとられたふるえる線、ずれるリズムと幻覚のメロディー。

音色変化とコントロールドを設定する。それとむすびついた動きのプロト

タイプを練習する。イメージをあたまのなかで追ったり、紙の上で構成しないで、かたちを指におぼえさせ、あたまで自由にしてやる。作曲や演奏というより、訓練だけだ。

心でかたちをつくりだそうとしたのは、まちがいだ。からだを型のなかに解放するとあらわれるなものかをききとることだ。

ちいさい音、たよりない声、息が音に変わる瞬間からはなれるな。きくひとのからだからちかちかぬけていくような音楽だけが、魂の出口をあけてくれる。きこえる音だけでうまくやろうとすると、人間だけのコミュニケーションのレベルにとじこめてしまう。古人はそれを人間の思いあがりと呼んだ。名人芸、それもひとつの限界だ、とマセダが言っていた。

人間的なうた、そこからはこの魂の自由を感じられない。逆に、遠いものと語りあう音を手にするには、沈黙に耐える以外にないが、そんなことが、だれにできるのだ。

ねずみの歌い手ヨゼフィーネのうたう前の姿勢、ふるえる胸、そらしたあたま、見上げる目。声はなかなかでこないが、どのみちそれはよわよわしいびいびい声にすぎない。沈黙のなかに、声もなく、演技力もないうたが、道をきりひらこうと、もがいている。その姿を見ると、笑いもとまる、といわれるヨゼフィーネ、歌のいけにえ。

ザムザのめざめ——ふあんなゆめからさめると、ひっくりかえったがいちゅうが、おきあがるうと、もがいている。ちがつくたくさんのあし。まどに

あたるあまだれ。ならないめざましどけい。たたくおと、とんとん。グレゴール、グレゴール、よぶこえ。こたえにならないびいびい。

ゆめからさめるのではない。ゆめのなかにめざめるのではない。ゆめがめざめるのだ。

なまえはなに？

オトラードク。

うちはどこ？

じゅうしょふてい。

そしてわらう。おちばのさらさらのようにびびくわらい、はいをつかわないでもだせるわらい。

このまちにはいつまでも、まだあきらまないあきがある。どこまでもひかりのないくもりぞら。なにもないとおりは、せいけつでしずか。とめてないどこかのひらきまどが、ゆっくりゆれ

る。ひろげたシートがどこか、てっぺんのテラスのてすりてひるがえる。ひらいたまどのカーテンが、どこかでひらひら。ほかににはなにもうごかない。

マライタ島の女たちのうたうメロディーの曲がり。なめらかな一歩から急にとびあがる、またはおちこむ。こわれた階段をとびこえたり、あしふみはずしたり。

ほそい竹笛にふきこむ息のむらで、音がひっくりかえったり、急に低い音に変わったたりするのをきいて、女たちの歌ものどをなにもかの息の通路に貸しているのだ、とおもった。

カフカの階段や廊下も、そういえば夢のなかのように、すぐふみはずしてしまうな。

小泉文夫さんが好きだったカリングの鼻笛トガリのことをおもいだして、

僕はフリーの ミュージシャン 坂本龍一

今は終わって全てがギョッと圧縮されてたため込まれている。それを一つ一つ解きほぐすのは難かしい。原稿用紙から目を移すと一枚の写真がある。ツアーの最後の日、ショウが始まる前にクルー・メンバー全員でとった写真だ。二階だての舞台の上から上手の方へカメラは向いていて、48人の人間がそれを見上げています。ほとんどの人間は笑っているように見える。人はなぜカメラに向かって笑うのか。写真って

ディレイされた鏡のようだ。とすると人は笑っている自分の顔を見たいのか。又、写真って動かないプロモーション・ビデオみたいだな。すると人は笑っている自分の顔を他人に見せたいのか。この笑いは何かを共有しているようにも見えるし、又この48人は何かを共有しようとしてこの瞬間笑ったのだとも思える。もちろん自然な笑いではないが、数時間後に終わる自分達の仕事の記念として笑顔を残すというのは格別変わったことではないのだろう。唯笑いには色々な種類があるし、高低もある。後ろ向きの笑いもあれば下向きの笑いもある。外に投げ出すものであると共に多少とも内向きさをもっている。このツアーは色々な始まりと終わりをもっていて、それらが整理できない程からまっている。様々な線が四方八方に伸びていて收拾がつかないのだ。僕はといえば、8年間に籍していた事

務所を辞めることになる。思えばそれはYMOの季節と共に始まったのだ。70年代のトンネルからやっと抜け出そうという頃——なんて言うのと、単におまえが70年代、何もやってなかっただけだ、なんて言われそう——なんとなく、全くなんとなくミュージシャンやらスタッフが集まってきた。多分僕らの周りで周波数の高いならんかの波を発信していたのだろう。そんな通俗的なことも言いたくなる様なノリがあったんだから。そこで何人かが集まって変な名前のオフイスを作った。もちろん最初は小さくて、場所も他のオフイスとシェアしていた。例によって業務が増えるにつれて、人が多くなり現在の乃木坂に移転をする頃、YMO事件が起こる。急に売れてしまったのだ。もちろんその前には、一回目の比較的快乐しいワールド・ツアーというものがあり——まだ売れてなかったし、僕に

してみれば初めて西洋人ばかりの客の前で演奏したのだ——その後には二回目の比較的苦しいワールド・ツアー——既に売っていたのでプレッシャーも大きかったし、個人的な事情でメンバー間にトラブルがあり、約2ヶ月というものがまるで監獄だった——があった。とにかく全てがYMOという怪物を中心に動いていかざるを得なかった。訳の分らない重苦しいものがメンバー全員にのしかかっていた。その内容は各々ちょっとずつ異なるとしても、そこで二回目のツアーの後、二枚のアルバムを作って自ら休業してしまったり映画の話が飛び込んでくる。全てはリンクされているように見える。世界はどんどんスウィッチされ、目紛しく次元が変わっていく。その中で翻弄されている僕とそれをポーッと見ている僕、ナインテ。映画の撮影から公開まで約一年、もちろんその間にサウンドトラ

ックも作る。映画が公開される頃、再びYMOの始動、怪物の最後の年の活動としてキャンペーンをやり、ラストツアーをやり、映画を作った。もうかつての様なプレッシャーやトラブルはなかった。全員の目的は唯怪物を葬り去ることだけだった。最後の写真集を「SEALED」——封印——としたのもその為だ。もうお前には用はない。永久に眠りつづけ再び姿を現すことのないように。

足枷のなくなった僕は色々なことをやり出す。本本堂という出版社を作り本を出したり、バイクと会ってビデオに興味をもったり、浅田彰と出会いイベントを企画したり、インディペンデントのレコードメーカーをつくったり。しかしそれら一つ一つのこととは、とても小さいできごとで、僕自身にも他人にとっても、とてもYMOから脱皮を決定づけるものとはならなかった。

初のツアーをやろうと決めたのは約一年前、動機はもう忘れてしまった。去年、9月15日つくば博覧会の前日ジャンボトロンで行なわれた「TV-WAR」が一つの大きな刺激になったのは事実だ。ここで出されたキーワードが驚くほど、イタリア未来派に吸い込まれていったのだ。もちろん20世紀の機械文明がまさに始まるうとしていた頃の彼らと、文明がもたらす大きな災禍を経験してしまっただけとはノリも違うし、同じことはファシズムに対しても言える。それなのになぜ、未来派の何が僕らを魅きつけるのか、未だに分らないのだ。

ウーンとうとうツアー自体の総括にまで至らなかつたが、やはりあのツアーはこの数年間の僕の到着点であり、次のトラックの始発点であるのだ。今は僕はフリーのミュージシャンです。

編集後記

かれはぼくたちを見つめている／ふし
ぎな雪をみるようにして／二人のタイ
人とカナダ人と日本の農民が／東北か
ら沖繩まで音楽をはこんでいく／ぼく
たちの日々を結晶させる空間の詩／カ
ラワンのキャラバンがさらっていく
——と、まず自分で書いた帯のフレ
ズを引用し、ついでお知らせですが、
スラチャイ・ジャンティマトンの日本
旅行記「メイド・イン・ジャパン」が
やっと出版された。日本で書いた歌の
歌詞や短編小説も入っている。目の前
に座っている、おなじ空間や時間を
わけあっているという気がまったくし
なかったが、エイリアンの目は正確に
はたらいている。新宿書房(☎03・
263・2735) 千八百円。

第二次世界大戦直前にアメリカからフ
イリピンに帰る船が神戸に寄港した。
港を向いた街は西洋だった。坂をのぼ
って裏通りに出る。そこはアジアの村
だった。——ホセ・マセダにきいた話
見慣れた場所も、たくさんのちがう場
所、ちがう日々、異文化のコンプレッ
クスだった。日本でなにかも間にあ
わせる生活をしていると、忘れそうに
なる。

ザミヤーチンの「われら」を読ん
ると、この反ユートピア単一国は、日
本そのものだ。みんな制服、おなじ時
間におなじことをするのが幸福。緑の
壁にかこまれて石油食品を食べている
幸福。私とワタシのリズムボックス。
ところで自由には、義務もなければ権
利もなく、単一世界が異文化のパッチ
ワークに分解していくと、日本人は異
文化を食べるエイリアンにすぎなかっ
た。(高橋)

* 予約購読の申し込みと送金は郵便振替を利
用してください。

口座名 水牛編集委員会
口座番号 東京四一九一七九二
購読料 一年分三〇〇〇円(送料共)
住所、氏名、電話番号、何号からと明記。

* 本誌は次の書店にあります。

- 模索舎(新宿) ☎三五二一三五七
- ブックイン(阿佐谷) ☎三三三〇一七八九七
- 信愛書店(西荻窪) ☎三三三三〇四九六一
- ワンラブブックス(下北沢) ☎四一一一八三〇二
- アール・ヴィヴァン(西武池袋店12F)
- カンカンポア(西武渋谷店B館B1)
- ストアデイズ(六本木ウエイブ4F)
- 名古屋ウニタ書店 ☎七三一一一三八〇

水牛通信 第八巻第七号 一九八六年
七月十日 定価二〇〇円 発行人 堀田
正彦 発行所 水牛編集委員会 ☎03
東京都世田谷区新町2-15-13 八巻方
電話〇三(四二五) 九六五八 振替口座
東京四一九一七九二 印刷所 鶴トライ
プリントショップ